

第2章 北白川C式土器について

—小阪遺跡出土土器を中心として

合田幸美 〔(財)大阪文化財センター〕

1. はじめに

大阪府堺市小阪遺跡では、1985年から1990年の調査において縄文時代中期末から後期初頭の土器がまとまって出土した。小論ではこの土器群を整理し、これを他遺跡出土資料と比較、検討したうえで土器群の年代的、平面的な位置付けを考えてみたい。具体的な作業としては、まず小阪遺跡出土土器を含む当該年代土器の器種分類を行う。次に小阪遺跡出土資料の器種ごとの序列を組み、型式として把握した後、年代的な位置付けを考える。次に同年代に位置付けられる資料がまとまって出土する他遺跡の土器群を、器種構成を中心に概観する。この成果に基づいて器種の存否や多寡にあらわれる地域色を明らかにし、これら土器群のなかにおける小阪遺跡出土土器の位置付けについてみる。近畿地方における中期後葉の土器型式は北白川C式であり、小阪遺跡出土土器も大きくはこの範疇に含まれるものである。北白川C式は京都市北白川追分町遺跡出土土器をもとに設定された型式である（泉 1985）。近畿地方で中期後葉の土器を扱うにあたり、この北白川追分町出土土器は土器量と器種の豊富さにおいて他の資料を凌駕するものであり、現時点においては比較の基準とすべき資料である。今回小阪遺跡出土土器の型式分類や他遺跡出土資料との比較を行うにあたっては、この北白川追分町遺跡出土土器を基におこなわれた諸作業に依るところが大きい。次項では北白川C式が設定されるに至った経緯および近畿地方縄文時代中期後半の編年における北白川C式の位置付けを学史のなかで明らかにし、その後諸作業に移ることとする。

2. 北白川C式の位置付け

近畿地方の縄文時代中期後半の土器区分は、古段階として醍醐Ⅲ式・星田式、新段階として番ノ面式・天理C式の二時期区分が過去に提唱されていた（岡田1965）。岡田氏の区分に従って各型式内容を概観してみる。醍醐Ⅲ式は隆帯によって口縁部に文様を描き、胴部には縦位の磨消縄文を施すキャリパー形の深鉢が指標となるもので、近江の西部から山城の東部および大和での分布が顕著である。星田式（桜井1963）は、大阪府交野市星田遺跡出土土器が標識であり、キャリパー形の器形で口縁部に沈線文で弧状の短直線を描き、頸部に波状沈線文、胴部に平行する垂下沈線文間に縄文を施す土器が特徴である。山城から摂津、河内、和泉における出土例が多い。番ノ面式は醍醐式の影響のもと、太い沈線による文様を施文する土器が主体である。天理C式は布留遺跡出土土器（島田・小島1958）を指標とする、口縁部に横位縄文、胴部に縦位縄文を施す土器である。この中期後半の土器群のうち、新段階である番ノ面式・天理C式にほぼ並行する土器群として北白川追分町出土土器が捉えられていた。その後北白川追分町遺跡の調査成果が蓄積されるなかで（中村1974）、それまでまとまった資料のなかった中期後半新段階の番ノ面・天理C式にかわる型式として北白川C式が設定されるに至った（泉 1982）。しかし、その後の北白川追分町遺跡の調査成果（中村1975）・（清水1984）・（泉・家根ほか1985）の整理、検討の

2. 北白川C式の位置付け

結果、同遺跡出土の土器の4期細分が可能となり「1・2期を醍醐Ⅲ式、4期を北白川C式と呼ぶことを提唱したが、本資料（略）が一連の土器であることを認め（略）北白川で出土した中期の土器という意味」で北白川C式が再設定された（泉 1985）。すなわち、醍醐Ⅲ式、星田式をも含む、近畿地方における里木Ⅱ式以降の中期の土器として北白川C式が設定されたのである。以上のことから北白川C式土器が更に細分されることは明らかであり、近畿地方のなかでも特に河内については「星田－恩智－馬場川O＝大官大寺下層SK370」とする土器の推移が指摘されている（宮野1983）。

北白川C式土器は前段階の土器と器種構成や文様構成が大きく異なり、東日本系、すなわち加曽利E式系の影響を多分に受けていたことは明らかであるが、東海地方の型式や加曽利E式系の諸型式間の並行関係はどうであろうか。まず東海地方との対比をみると、船元Ⅳ式・里木Ⅱ式と中富式・咲畑式がほぼ並行し、船元Ⅳ式と中富式は加曽利EⅠ式と、里木Ⅱ式と咲畑式は加曽利EⅡ式と対応すると考えられている（泉 1985）。咲畑式につづく取組式は、加曽利EⅢ式と酷似する（増子1981）ことから、北白川C式は、中津式と称名寺式が並行する型式とみれば、東海地方では取組式、島崎Ⅲ式、山ノ神式と、関東地方では加曽利EⅢ式、EⅣ式と並行することとなる。しかし、里木Ⅱ式と北白川C式は継続するものではなく、東海地方の型式と比較した場合その間には幾つかの型式が設定されるべきであるとする見解が一方にあり、それによれば、北白川C式は取組式を含まず島崎Ⅲ式、山ノ神式と並行する（増子1988）。また、北白川C式の成立については、北白川C式は加曽利EⅢ式のとき、もっと具体的にいうならば東京・埼玉第5段階と長野県の唐草文第4時期の一挙的流入によって成立したとする見解（泉1985）と、東海地方の島崎Ⅲ式・北陸西部の大杉谷式などの二次的な影響下において北白川C式は成立したとする見解（増子1988）がある。

以上北白川C式の年代的な位置付けについて学史を通して見直し、おおむね中期後葉に位置付けられることがわかった。なお、加曽利E式、曾利式の影響を強く受けた渦文系の土器群を指す様式名として「咲畑・醍醐式土器様式」が提唱され、北白川C式は、これの第2様式b期以降に位置付けられている（泉 1988）。小論では、これらの成果に導かれつつ、北白川追分町遺跡出土土器である「北白川C式」を基準として同年代の資料を扱いたい。

Tab.93 各型式間の並行関係

近 畿	東 海	関 東
船 元 Ⅳ	中 富 Ⅰ 中 富 Ⅱ 中 富 Ⅲ 中 富 Ⅳ	曾 利 Ⅰ 加 曽 利 E Ⅰ
里 木 Ⅱ	咲 畑 （ 中 富 Ⅴ ） （ 神 明 ） （ 取 組 ）	曾 利 Ⅱ 曾 利 Ⅲ 加 曽 利 E Ⅱ
北 白 川 C	島 崎 Ⅲ 山 ノ 神	加 曽 利 E Ⅳ
中 津	林 ノ 峰	称 名 寺

3. 器種分類

小阪遺跡出土土器から得られた2、3の私見を加えながら、小阪遺跡出土土器を含む北白川C式土器の器種分類を示す。なお、報告文中では本土器群はⅣ群14～24類としたが、ここではより微視的に見、また、他遺跡出土資料との比較作業における利便上、北白川追分町遺跡報告書で用いられた分類名を使用する。

深鉢A類 口縁部文様帯をもち、水平口縁もしくは主文様部は波状文を呈する深鉢。口縁部と胴部とを区分する手法より6類に細別される。

深鉢A1類 口縁部と胴部とを隆帯で区分する土器。隆帯を境とし、わずかに器壁が内折し、口縁部が立つ。

深鉢A2類 A1類と同様の器形をなすが、口縁部と胴部がより直線的につながる土器。隆帯で区画された口縁部は文様帯をもつものと、縄文主体のものがある。

深鉢A3類 口縁部と胴部の境が「く」の字状に屈曲する土器。

深鉢A4類 口縁部と胴部とを多重沈線による連弧文、波状文、短位直線文で区分する土器。星田式系＝胴部に垂下沈線を施さず縦位縄文が主体と、東海系＝胴部に垂下沈線を施すものの2つの系統がある。

深鉢A5類 口縁部と胴部とが文様帯の相違だけで区分される土器。

深鉢A6類 口縁部文様帯を消失した土器。

深鉢B類 口縁端部から一段下がったところに隆帯で楕円形区画文を横に連ねた文様を施す土器。胴部文様は垂下沈線文とその間の縦位縄文である。楕円形区画文のつなぎ部の違いから2つに区分できる。

深鉢B1類 楕円形区画文のつなぎ部が橋状把手となる土器。

深鉢B2類 楕円形区画文のつなぎ部が突起となる土器。

深鉢AC類 山形口縁と水平口縁が組み合わさった口縁部で、胴部がややくびれた器形をもつ土器。

深鉢C類 突起状山形口縁をもつ胴部がきつくくびれた深鉢。

深鉢C0類 口縁部が筒状を呈する土器。

深鉢C1類 口縁部文様が楕円形区画文を基調とした文様の土器。

深鉢C2類 口縁部に1本の沈線文を施す土器。

深鉢C3類 口縁部文様が省略された土器。

深鉢D類 縄文だけで器面を飾る土器。

深鉢D1類 直口口縁ないしやや外反する口縁で不定方向の縄文を施す。

深鉢D2類 口縁部に横位の、胴部に縦位の縄文を施す土器。口縁部と胴部の境に隆帯をめぐるものと文様だけで区別するものがある。

深鉢E類 櫛描条線文だけで器面を飾る土器。

深鉢F類 無文の粗製土器で、a粗いナデを施すものと、b条痕を施すものがある。

浅鉢A類 「く」の字形に内折した口縁部の有文浅鉢。

浅鉢A1類 多条の沈線文で口縁部文様を描く土器。主文様部に渦文や多重三角形文を配し、それを多重の楕円形区画文でつなぐことが多い。主文様部の口縁は波状を呈する。

浅鉢A2類 つなぎ部の文様が1・2条の区画沈線文で、主文様部に渦文、つなぎ部に楕円形区画文を描く土器。

4. 各器種の分析

浅鉢A 3類 つなぎ部の文様に刺突文を用いる土器。

浅鉢A 4類 A 1～A 3類に含まれない浅鉢A類。

浅鉢B類 口縁部が「く」の字形に内折した、無文で研磨の著しい土器。

浅鉢B 1類 口縁部の幅が広く口縁と屈曲部が肥厚する土器。

浅鉢B 2類 幅の狭い口縁部の上下が凸帯状に肥厚し、数カ所に橋状把手状の突起がつく。

浅鉢C類 外反する口縁の浅鉢で、口縁部内面に文様帯を有する土器。

浅鉢C 1類 内面に沈線文を施す土器。

浅鉢C 2類 肥厚した内面に縄文を施す土器。

浅鉢C 3類 内面肥厚帯が無文の土器。

浅鉢D類 無文の浅鉢で皿形を呈する土器。

その他の器種 無文鉢など。

4. 各器種の分析

各器種の分析を試み、小阪遺跡出土土器の整理をする。器種毎に施文技法と文様意匠の二要素からなる「文様」によって、主にその省略化の方向性から器種内の序列を組み、器種間の「文様」の比較によって同時性を示す。こうして得られた小阪遺跡出土土器型式の年代的な位置付けをみることにする。

深鉢A 1類では、口縁部と胴部文様を区画する隆帯と口縁部文様が注目される。隆帯は(34)(44)の断面台形→(37)(38)の断面三角形→(45)のなだらかにつながるものへと、痕跡的に残る傾向がうかがわれる。口縁部文様は区画内に施される横位羽状沈線文が刺突文となり省略化される。また、区画内文様も沈線文が1条描かれるのみである。各要素の退行現象にともない、器壁が薄くなり器形がなだらかな曲線を示す傾向がうかがわれる。

深鉢A 2類は、口縁部が外反して開き、隆帯は痕跡的あるいは口縁部を肥厚させ隆帯に変えるものがみられる。口縁部文様は縄文のみであり、口縁部の幅が狭くなる。

深鉢A 4類は、口縁部文様が渦文と区画文が一連のもの(49)→渦文と区画文が独立したもの(54)→沈線文間充填縄文(55)といった省略化の傾向が追え、これとともに口縁部と胴部を区画する文様が連弧文(49)(54)→波状文(55)となり、後者はさらに横位短直線文(47)(48)(44)(45)へ省略化される。

深鉢B 2類は、口縁部から一段下がったところに施文される区画文内に刺突文を施すもの(73)(74)→無文のもの(72)(642)への文様退行現象が認められる。

深鉢A C類は完形もしくは大きな破片でなければ水平口縁と山形口縁が組み合わされる器形であることが確認できず、類例としては大阪府河内長野市三日市遺跡出土例を知るのみである。(75)は隆帯と隆帯下の沈線文より、口縁部と胴部内文様帯を区画する意図がうかがわれ、口縁部には区画文が、胴部には「J」字文が施文される。これに比べ三日市遺跡出土例は簡略化された文様が新しい要素を示す。

深鉢C類は分類の要素として大きく口縁部の形と口縁部文様の2つがあげられる。口縁部の形では、筒形口縁、断面台形になる口縁、波頂部をもつ口縁があり、口縁部文様では区画文、沈線文、無文がある。この2つの要素のうち退行現象が明らかなものは後者の口縁部文様である。先述した分類は目安となりやすい器形からC 0類を別類とし、口縁部文様の退行現象より深鉢C 1(区画文)→C 2(沈線文)→C 3(無文)類としたもので、2つの要素より分類している。C 0類は口縁部文様が沈線文(77)→縄

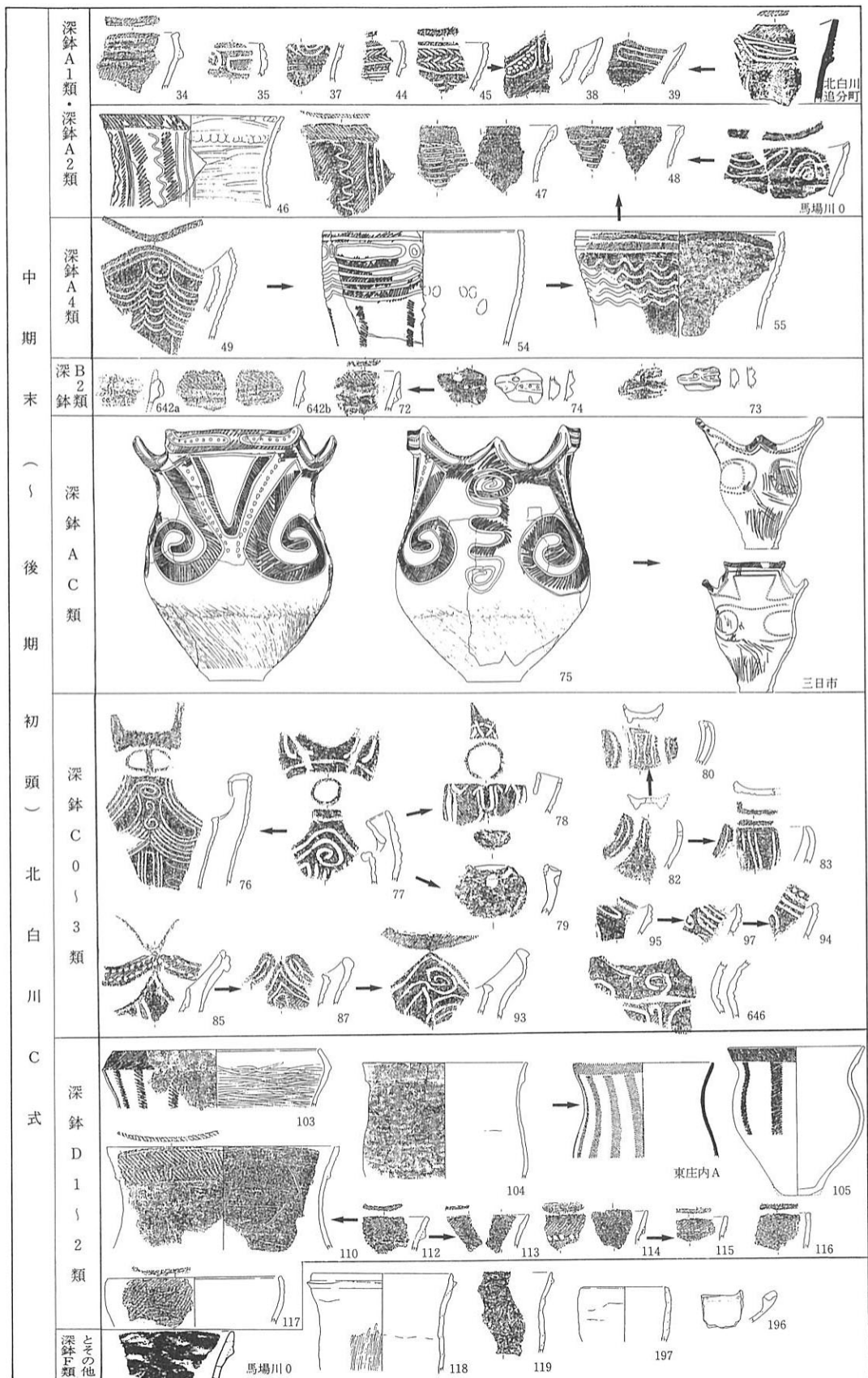


Fig.472 小阪遺跡出土北白川C式土器の各器種

5. 資料の整理

文のみ(76)となり、器形的には、筒形口縁がより突起する(78)ものと筒の上部がふさがり窪み状となる(79)の相反する2つのものがある。断面台形の口縁部では口縁部文様の後退(82)→(80)(83)と口縁部と胴部文様を区画する隆帯の退行(80・82)→(83)がうかがえる。波頂部をもつ口縁部では口縁部文様の退行(85・87)→(93)と隆帯の退行(85)→(93・87)がみられる。

深鉢D2類では隆帯の退行がみられ、しっかりした断面三角形のもの(112・114)→痕跡的なもの(110・115)→口縁が肥厚するもの(113)の変化が想定できる。

小阪遺跡出土資料では以上の器種内に於ける序列がうかがえる。器種間に共通する点は、

- i. 器形はゆるやかにくびれたものが主体である。
- ii. 隆帯の様相が、深鉢A、C、D類において共通する。
- iii. 文様は沈線文による施文であり、隆帯による施文はみられない。
- iv. 口縁部文様の渦文、区画文の連続性や省略の仕方が共通する。

以上4点がみられ、主に河川出土の土器であるが、小阪遺跡出土北白川C式土器はほぼ同一型式内におさまるものとする。ここで、器種構成をみた場合、深鉢A1類5%、A2類14%、A4類14%、B2類5%、AC類2%、C0類5%、C1～3類30%、D類24%、F類3%、浅鉢B2類1%である。深鉢C類、D類が多く、これにA1類、A2類がつづき、深鉢B類は少ない。

ここで先述した器種分類の全器種を網羅する北白川追分町遺跡出土土器における各器種内の序列を概観してみる。深鉢A類では渦文が区画文と一連の文様であったものが次第に区画文から切り離され独立した文様になる。また、渦文が省略され隆帯のみのものもある。A4類は器形がきつくくびれたキャリパー形からゆるやかにくびれをもつ器形へと変化する。深鉢B類ではつなぎ部が橋状把手のB1類から突起であるB2類へと退行する。文様も、楕円形区画文があり「ハ」の字形羽状沈線文を充填するものから、楕円区画文が省略され充填される文様が沈線文のみや無文になったものへと変化する。深鉢C1類は口縁部の文様が胴上部へと移行する現象がみられる。すなわち口縁部文様渦巻区画文から横「C」字文に変化し口縁部の文様が消失する一方で、渦文と区画文が胴上部に施されるようになる。浅鉢A類は主文様を隆帯で囲む土器から隆帯がない土器へ、そして口縁部の幅が狭くなる土器へと推移する。浅鉢B類は口縁部の幅が広いものから狭いものへと変化する。以上より器種をこえた文様で推移が追えるものには、隆帯区画文、羽状沈線文、橋状把手、多重区画文の4種があげられ、それぞれに概観したような退行現象がみられる。

北白川追分町遺跡報告では、このような器種をこえた文様の類似をもとに各器種の序列が組まれ、北白川C式1期～4期の型式変遷が示されている。小阪遺跡出土土器はこれとの比較では北白川C式4期に、咲畑・醍醐土器様式内では北白川C式3様式b段階に相当する。

5. 資料の整理

本項では、各地域のまとめた資料を中心に、器種分類→各器種内出の序列→文様からみた他器種間との共時性＝型式の把握を念頭におき、器種構成を主に概観する。

大阪府馬場川遺跡O地点 深鉢A2類と深鉢D2類が多い。隆帯によって口縁部と胴部を区画するものの、口縁部文様帯が簡略化し縄文だけを施す土器が多く、深鉢A2類とした土器も深鉢D2類に口縁部文様あるいは胴部文様を施すものである。深鉢D2類のなかで隆帯の押圧文もしくは刺突文を施す土器

が注目される。中津式土器が多く出土している。

大阪府恩智遺跡 深鉢D 2 類のなかで口縁部が「く」の字状に内折する土器がある。深鉢B 1 類が1 点含まれる。北白川C式土器とともに中津式土器が多く出土し、双耳壺が含まれる。

大阪府森の宮遺跡 深鉢A 1 類が多いが、文様はすべて沈線文で施文され隆帯を用いた文様はない。深鉢C 類のなかで口縁部が断面楕円形の筒状の土器がある。また、中津式土器の範疇に含まれる土器と考えられるが、なだらかな波状口縁の区画文が施される土器で「J」字文磨消縄文の直前の段階の可能性をもつ土器がある。

大阪府野畑遺跡 1 次 北白川C式土器は深鉢A 1 類が1 点あるのみでその他すべて磨消縄文土器である。中津式土器のなかには、波頂部に円形の区画文を施す土器や平行沈線文と押圧文を施す土器があり、典型的な中津式土器の前段階の土器と理解できようか。

大阪府野畑遺跡 2 次 4 層が中期末を中心とする北白川C式の包含層、5 層が星田式単純層であり近畿地方における中期後葉の土器を考えるにあたっては好資料を提供する遺跡である。また、5 層上面では土坑をはじめとする遺構が確認され、石斧を伴って完形に近い土器が出土しておりプライマリーな出土状況を示す。4 層出土土器は深鉢A 4 類とC 類が多く、C 類のなかには突起状の山形口縁で口縁部が連結し筒状になる土器が含まれる。浅鉢ではB 2 類の橋状把手が幅広くしっかりつくり付けられた土器があり古相を示す。またヘナタリによる擬縄文を施す土器片が数点含まれており中津式の前段階からの存在が注目される。中津式的な土器では「J」字文の先端部を描く胴部片が1 つあるが、櫛描状の沈線文で区画内が充填されている。

大阪府西浦橋遺跡 D 2 類が多く、文様が簡略化された土器が多い。A 1 類のなかに隆帯で区画した口縁部に同心円状に沈線文で文様を描く土器があり縁帯文土器と類似する。キャリパー形の口縁部が含まれるが咲畑式であろうか。

大阪府仏並遺跡 中期末葉の遺構が検出され、出土土器より393-OU→354-OD→405-OO→195・196・247-OOの変遷が考えられている（松尾1986）。393-OUの土器は報告書では写真のみであり詳細は不明であるが、胴部に連続する紡錘文を施す。354-OO出土土器は深鉢A 4 類とD 2 類が多く、粗製土器には縄文を施す土器と条痕調整の土器がある。縄文を施す土器は縄文が深いものと浅いものが交互にあらわれ、小阪遺跡の縄文と共通の特徴をもつ。405-OOも354-ODと同様の傾向があるが深鉢C 類は含まれずA 2 類が存在する。196-OO出土土器は沈線文主体である。247-OOは深鉢A 2 類が多く、文様構成が京都府平遺跡出土土器と類似する土器がある。

奈良県大官大寺下層遺跡 文様を密に施す古相を示す土器から文様が簡略化した新相を示す土器が含まれる。櫛描状線文が施される深鉢E 類が3 個体あるが、これらは中津式に帰属する可能性を残す。中津式とした磨消縄文を施す土器は水平口縁であり、深鉢A 6 類との差異は微妙なところである。

和歌山県市脇遺跡 中津I 式古段階の土器が多く、型式学的に北白川C式から中津への変遷を考えるにあたっての好資料が含まれる。器種では鉢の存在が特筆される。深鉢D 2 類のなかでは、口縁部が肥厚せず直口する口縁に横位縄文、胴部に縦位縄文を施す土器が多い。

和歌山県下尾井遺跡 中津I 式古段階の土器が多く、双耳壺の把手部が2 個体含まれる。深鉢A 2 類、A 5 類には区画文なしで口縁部に羽状沈線文が施される。

京都府北白川追分町遺跡昭和31年採集土器 深鉢A 1 類、B 1 類の区画内には羽状沈線文が描かれる。また深鉢A 4 類の連弧文は押し引き沈線文を用いる。

5. 資料の整理

京都府北白川追分町遺跡 非常に器種が豊富であり、形式的にも継続性が認められる。器種構成のなかでは深鉢A 1類、A 6類、B 1類、B 2類、C 1類が量的に多くを占める。無文の壺が1点含まれる。

京都府北白川追分町BF33区SB1・2 深鉢A 1類のなかではA 1類、A 4類が認められ、A 2類とA 3類は出土していない。深鉢B 1類とともに深鉢C 0類が出土する。

京都府北白川追分町BE32・33区 深鉢A 5類、A 6類とB 2類、D 2類が多い。北白川追分町各地点出土土器中最も新しい様相を示す。

京都府柳谷口遺跡 深鉢A 3類が卓越する。また文様の細部では外面から施文した沈線文に対応するかたちで内面が膨らむもの、沈線文内に刺突文を施すものが特徴的である。

京都府裏陰遺跡 ほとんどの土器が中津I式古段階に比定され、ゆるく内弯する器形の鉢が含まれる。深鉢C類が多く、これをはじめとして深鉢A 1類などに柳谷口遺跡同様刺突文や沈線文内に刺突文が施される。また、胴部片には垂下沈線文と斜行沈線文を施す土器があり、北陸地方との関連が注目される。滋賀県滋賀里遺跡 隆帯のしっかりした深鉢A 1類が一定量含まれる。深鉢A 5類、A 6類としたが「H」字形の磨消縄文を施す中津式に類似する土器もある。

滋賀県葛籠尾湖底遺跡 星田式のキャリパー形口縁をもつ深鉢A 4類が、波状口縁を呈するA 6類とともにある。双耳壺にプロポーションが似る注口土器が注目される。

滋賀県醍醐遺跡 隆帯で文様を描き、口縁部と胴部を区画する隆帯がしっかりした深鉢A 1類が多い。橋状把手のつく深鉢B 1類も含まれる。加曽利E式や曾利式の影響が強い土器である。

滋賀県番ノ面遺跡 隆帯による文様は無いが、加曽利E式や曾利式の影響が強うかがわれる土器群である。

三重県東庄内B遺跡 深鉢B類とC類が多い。深鉢B類では、口縁端部からの無文帯が幅広い土器があり、胴部片に縄文を施さず垂下沈線文と斜行沈線文からなる土器とともに曾利式土器の影響が色濃うかがえる。深鉢C類の文様は2系統ある。1つは渦文あるいはS字文の両脇に区画文を配し縄文を施す土器であり、北白川C式に多い。1つは沈線文のみで多重の渦文を密に施す土器である。後者は深鉢A 4類においてもみられる。

三重県東庄内A遺跡 中津式を多く含む土器群である。SK6では深鉢D類、E類および壺が共に出土している。深鉢A 1、A 2、A 3、A 4類と深鉢B類は出土せず、器種構成における年代差を考えるうえで好資料である。

三重県地藏僧遺跡 沈線文が主体の土器が多い。深鉢B 2類やA 5類のほかに、深鉢A 2類とA 4類が含まれることから、東庄内B→地藏僧→東庄内Aの変遷が考えられる。

三重県起A遺跡 SK15出土土器である。隆帯がなく内弯する口縁部をもち、連弧文で文様帯を区分する深鉢A 4類が非常に多い。胴部文様は垂下沈線文と斜行沈線文からなるものが多く、曾利式の影響が強く現れている。

愛知県石瀬貝塚 深鉢A 5類が多く、深鉢C類は含まれない。文様は沈線文、櫛描文を多用し、区画内の充填も同文様を用いる。胴部片には斜行沈線文を施すものがある。特異な土器では鉢形土器が1点ある。口縁部を逆「L」字状に屈曲、肥厚させ、作り出した面に刺突文を施すもので、小阪遺跡出土鉢形土器の比較資料となり得る。

岐阜県宮之脇遺跡 深鉢A 2類が多いが、隆帯を除けば文様は簡素であり、深鉢A 5類に類似する。櫛描文を多用し、胴部には櫛描文で斜行沈線文を施すものがある。深鉢D 2類は隆帯に刺突文を施し馬場

川遺跡の地点出土土器と類似する。刺突文は深鉢C類の口縁部文様にも多用され注目される。

愛知県林ノ峰貝塚H層 深鉢A5類が圧倒的に多く、口縁部と胴部の区画に隆帯を巡らせるものはわずかにあるものの、口縁部を肥厚させる土器は含まれない。文様は沈線文主体であり、胴部片には垂下沈線文間に斜行沈線文を施すものが多い。深鉢A6類としたものは中津I式古段階の文様構成に似るものの、縄文地に沈線文を施したり区画文の内外に縄文を施文しており、磨消縄文には至らない。山ノ神式2期に並行か。

愛知県林ノ峰貝塚G層 北白川C式と中津式の割合が半々であり、同貝塚のE層出土土器が全て中津式であることから、前述のH層山ノ神式2期とE層中津式との中間に位置付けられる土器群である。本層の北白川C式土器群と中津式土器群を比較すると、器種構成ではA5類としたゆるやかな波状口縁もしくは水平口縁の土器が共通し、文様は前者が沈線文主体であり後者は「J」字形の磨消縄文が施される。また前者には深鉢A1類、A2類やB類が含まれるが、後者には含まれず深鉢A5類、A6類が主体である。両者をつなぐ漸移的な土器は認められない。粗製土器は帰属が明らかではないが、H層にはみられなかった、縄文あるいは条痕により調整された土器が含まれる。

福井県右近次郎遺跡 第16～17群土器とされる中期末葉から後期初頭の土器群のなかで、星田式類似土器を含む北白川C式土器が4片認められる。同土器群は中津式もしくは称名寺式の古相を示す土器が多数を占め、双耳壺も含まれる。

兵庫県丁・柳ヶ瀬遺跡 深鉢A4類が多い。口縁部と胴部を区画する文様として、波状文や連続しない多重弧文、また波状文の特異なパターンと理解される波状の連続文が使用される。深鉢A3類も含まれ、「く」の字に内折した口縁部に2列に刺突文を施す。

兵庫県片吹遺跡S B07 深鉢A5類、A6類が多いが、口縁部片であり中津式である可能性が大きい。深鉢C類は文様がかかなり簡略化され粗雑な施文である。

兵庫県片吹遺跡S B08 深鉢A3類が多い。深鉢C類が認められないものの器種はバラエティーに富み、磨消縄文が含まれないことからS B07に比べ古相を示す土器群である。胴部文様では紡錘文が目立つ。

兵庫県篠原A遺跡住居跡 深鉢A2類とした土器はほぼ口縁部のみの残存であり、口縁部を肥厚させ口唇部と隆帯に刺突文を施す無文の土器である。深鉢D1類のうち1個体は口縁端部から1段下がったところに2列の刺突文を巡らせる。

岡山県日羽健行田遺跡 中津I式古段階と北白川C式土器が出土する。北白川C式土器は深鉢A1類、A2類とC類からなる。深鉢B類、D類は含まれず、また文様は沈線文が主体である。深鉢C1類の土器は頂部に円形の区画をもち、中津式土器の文様構成の前段階にあたるものと考えられる。

岡山県里木貝塚 中津I式古段階にあたる。北白川C式土器はA6類が多く文様は沈線文主体である。なかでも深鉢A4類は波状文が胴部最大径付近に粗く施文され、最終段階にくだる可能性がある。胴部に紡錘文を施すものが多い。

広島県洗谷貝塚 中津I式古段階に比定できる土器が多い。北白川C式土器では深鉢A6類、C3類が多く、C3類は中津式への文様の変遷を考えるにあたって重要な資料である。深鉢D2類とした土器は口縁部が逆「L」字状に屈曲し、沈線文で区画した口縁部にRL縄文を施す土器であるが、近畿地方にみられる深鉢D類とは系譜が異なるかもしれない。文様は沈線文主体であり、粗製土器は条痕調整である。

香川県大浜遺跡 中津式および中津式の可能性をもつ深鉢A6類が多いものの、深鉢A1、A2、C1、C3類が含まれる。深鉢C1類は屈曲する口縁部に区画文を施し、山形口縁の波頂部の下に「J」字に

近い意匠の区画文を描く土器であり、注目される。

鳥取県桂見遺跡 深鉢A 3類、C 3類が多い。深鉢C 3類は沈線文が主体であり、区画文を多用するものと渦文を多用するものがある。

6. 器種構成と文様からみた地域差

各地域の器種構成を年代幅を包括したうえで比較すると、器種の組み合わせとそれぞれの器種の量の多寡という2点によって地域差が存在するらしい。すなわち、愛知県、三重県を中心とする東海地方は、深鉢A類からF類まで存在し、A 5類が多くを占める。なかでもゆるやかな波状口縁をもち、胴部の屈曲が弱い土器が目立つ。京都府南部、大阪府、和歌山県、奈良県、滋賀県西部を含む近畿地方では、北白川追分町遺跡が量的にも、また器種のバラエティーにおいても他を凌駕する。全体的に器種が多くそろい、各遺跡において深鉢A 4類やC類がみられる。近畿地方のなでも微視的にみるならば、京都府南部と大阪府では、A 1、A 2、C類の比率が高いようである。また、D類についても大阪府小阪遺跡、馬場川遺跡O地点、西浦橋遺跡、奈良県布留遺跡、和歌山県市脇遺跡、三重県東庄内A遺跡などで多く出土しており他地域では少ない。鳥取県、兵庫県北東部、京都府北部、福井県南部からなる山陰、丹後、若狭の日本海側から中国地方にかけては、深鉢A 3類、A 4類が主体であり深鉢B類の出土はみられない（玉田1985）。また粗製深鉢についてもD 1類が主体を占め、E類の櫛描文は含まれずF類の条痕文は稀である。岡山県、広島県、香川県を中心とする瀬戸内地方は船元、里木Ⅱ式系の土器のもと里木Ⅲ式が主体を占める地域であるが、北白川C式が客体的に存在する。北白川C式土器では、中津式に近い深鉢A 6類を除けば深鉢C類が多く、A 2類がこれにつづく。粗製土器はD類である。この器種構成は近畿地方に類似し両地域の関連が注目される。これに類似する状況が福井県北部においてもうかがえる。資料が右近次郎遺跡に限られるものの、中期後葉の大杉谷式の土器が主体を占めるなか、北白川C式土器が客体的に存在し、深鉢C類は含まれないが、深鉢A 4類が出土している。

文様においても、年代幅を包括したうえでの地域差がうかがえる。縄文土器の場合、文様は器形と密接に結びついており、先に検討した器種構成からみた地域差と重複する部分が多い。文様は施文技法と意匠の2要素からなり、ここでは主に沈線文と縄文の割合と文様意匠についてみていきたい。近畿地方では連弧文、波状文、多重の横位短直線文が器種をこえて多用される（深鉢A 1類、A 4類、C類）。また、隆帯を用いて文様を描く土器（深鉢A 1類、B類）や磨消縄文を用いる土器が多い。ここでいう磨消縄文は、深鉢A 5類、A 6類でみられるような比較的節の細かい縄文を用い、区画文の内（外）を丁寧に磨り消すものではなく、区画文の施文後中期末葉に普遍的な節の縄文をころがすものと、縄文地に区画文を施すものの2者である。両者とも縄文と区画文の境界において丁寧に磨り消すものは少なく、縄文がはみでた状態のものが多い。東海地方は沈線文を多用する点が特徴的である。文様では、口縁部に多重の渦文、胴部に縦位の斜行沈線文または逆「U」字状の垂下沈線文を多用し、曽利式の影響が窺える。また、粗製土器は櫛描文が主であるが、条痕文の土器も含まれ、近畿地方周辺の縄文主体の粗製土器と対照的である。山陰、丹後、若狭から中国地方および瀬戸内地方の土器文様は、東海地方には及ばないものの近畿地方に比べ沈線文のみで施文する土器が多い。また、この地域では、深鉢C類の頂部下に渦文、その両脇に区画文を配する土器が多い点、胴部文様が垂下沈線文が少なく紡錘文が多い点も共通する。特に鳥取県では、深鉢C類中C 1類が多いものの、胴部文様は簡略化しており、文様は新相を示す。

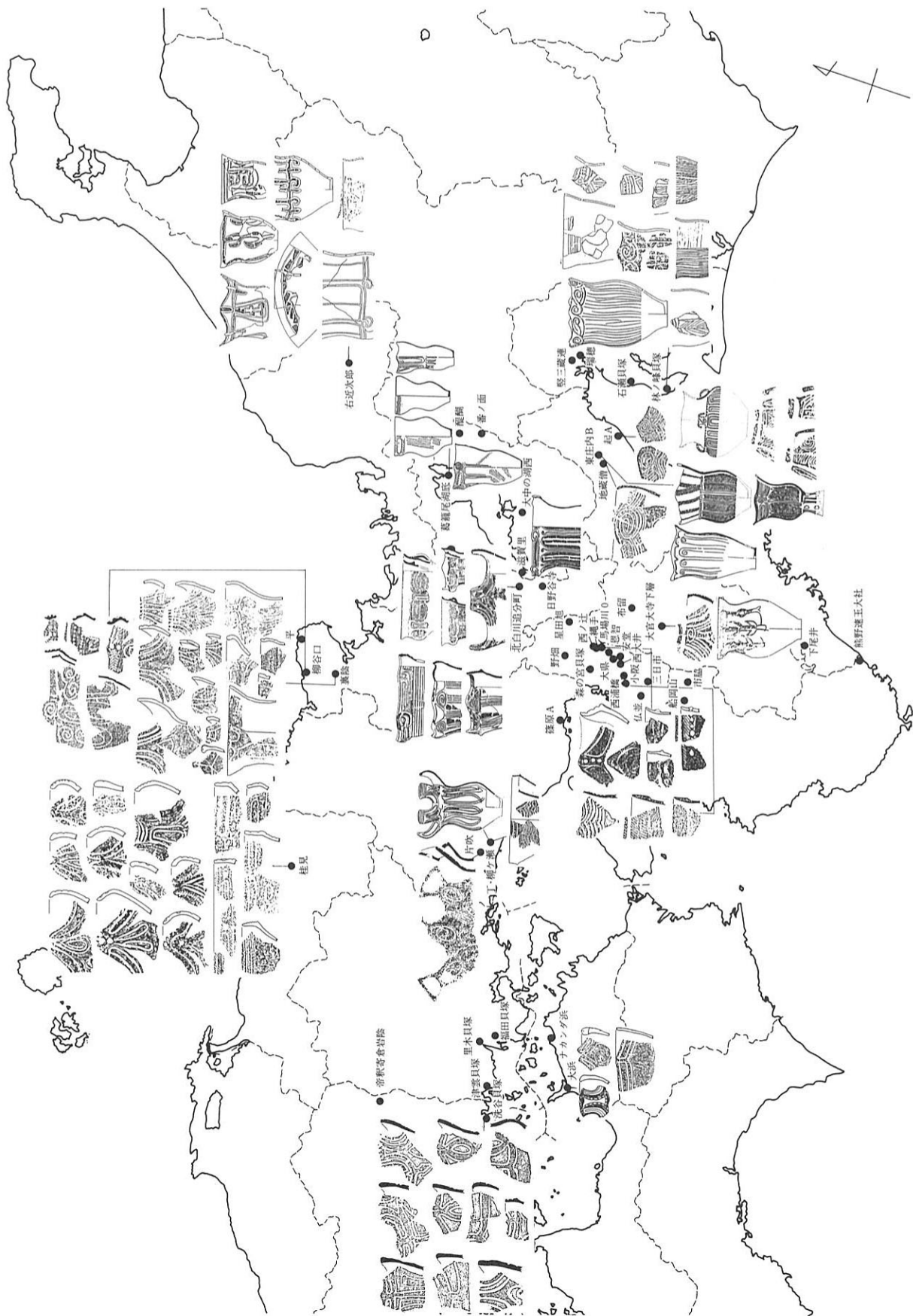


Fig. 473 各遺跡出土の北白川C式土器

Tab.94 各遺跡における北白川C式土器の器種構成

	遺 跡 名	深鉢																浅鉢														備考
		A1	A2	A3	A4	A5	A6	B1	B2	C0	C1	C2	C3	D1	D2	E	F	A1	A2	A3	A4	B1	B2	C1	C2	C3	D					
	小阪	3	9		9					3	3	14	5	1	2	14	2															北白川C66:中津10双耳壺ヘナタリ有
1	馬場川O	3	6								2				10	1																北白川C31:中津23中津に鉢有
2	恩智	1			1			1									2	2								1						北白川C13:中津10双耳壺有
3	森の宮	6	1				1				1		2																			北白川C18:中津5里木田出土(1片)
4	野畑1次	1																														北白川C1:中津28
5	野畑2次	3		1	17					3	2	2	7	2	2		2	2	1				1	4	2	1						4層中末5層星田中津?1
6	西浦橋	3	1		1		1					1	1			8																北白川C21:中津7
7	大鼎		1																													
8	安堂								1																							
9	三日市													1																		(75)に類似(完形)
10	西ノ辻					1	1																									ほぼ完形キャリバー形プロボーション星田式
11	仏並393OU																															胴部連続する紡錘文
11	仏並354OD	2			5	3	2				1			2	4		1							1								
11	仏並405OO		2		2											2																
11	仏並196OO					1		1																								B1は浅鉢B2の可能性有
11	仏並247OO		3			2									2																	鉢形土器有
12	西大井					1																										プロボーション星田式
13	星田旭					1																										
14	縄手				3										1																	平式に似た口縁部有沈線胴部山ノ神式と類似
15	大官大寺下層	3			5	1							1				3															北白川C14:中津3深鉢Eは中津に含まれるか?
16	布留																															
17	市脇	4	1			1									1	8																中津1古北白川C15:中津32鉢有中津への変遷迎れる土器有
18	船岡山						1										1															鉢有充墳橋樑有北白川C2:中津5
19	下尾井	1	1			5																										北白川C7:中津19双耳壺2
20	熊野連玉大社												1																			1 磨消縄文浅鉢1
21	北白川追分町31年	4			3			1			1													2								
22	北白川追分町	33	9	4	9	11	19	20	16		21	7	8	13	6	2	4	12	9	7	5	2	6	1	4	3	2					壺1(無文)
23	北白川追分町SB1,SB2	7			2			2	2									1						2								
24	北白川追分町BE32,33	4	10				2	2	5	6		9	4	3		2			3						4	1						
25	北白川小倉町		1																													渡状D
25	北白川上終町	1																														プロボーションは古相
26	日野谷寺SK428	1	1					1																								北白川C3:中津3充墳縄文?
27	柳谷口				5		1			1			1																			A3多し北白川C13
28	平			1							1																					胴部紡錘文(A3)
29	裏陰	2			3		4				3	2																				北白川C19:中津18中津1古鉢有
30	汲賀里	4	2		3	6	2		1	2		2		4																		北白川C32(うち中津らしい土器5)
31	葛籠尾湖底		2		1	2																										注口土器1
32	大中の湖西		1			1																										A5:紡錘文
33	醍醐	6	1			1	2		1				1																			
33	番の面		1					1					1			1																
34	東庄内B					3	6			5		3		4	1			3						1	1							中津なし台付鉢有
34	東庄内A						3				1				2	2	2															口唇部刻む浅鉢?有壺有北白川C33:中津18
35	地藏僧		1		2	2	1		1				1																			全て北白川C
36	起A	2	1		19							1	1	2																		区画内の処理粗雑
37	石瀬貝塚	1	2		1	7	1	1																								鉢形土器有
38	宮之脇	1	6		1	1	1					3			3																	Bに類似の土器有
39	林ノ峰貝塚H層						11	2		1				1		2																全て北白川C(A5, A6多いが)H山ノ神2
39	林ノ峰貝塚G層	1	17				9	9		1			2				3	3		1				1								北白川C60:中津61中津と共伴
40	堅三蔵通													1																		深鉢C斜行沈線
41	瑞穂						1																									
42	右近次郎16~17群		1			3																										中津地名寺多い双耳壺有
43	丁・柳ヶ瀬A・B地区	1	2		2	5						1	2																			D地区磨消縄文
44	片吹SB07							3	9			1	1		1			6						1								壺双耳壺把手部分(?)有
44	片吹SB08		1	4	1	3	2									1									2							SB07よりも古
45	藤原A住居跡		3	1		2									2	2	2								1							壺有
46	日羽建行田	1	1				1				1	1		2																		北白川C14:中津16中津1古
47	里木		2			1	2	4																								北白川C8:中津12中津1新
48	福田	1	1													2																渡状文双耳壺鉢有
49	津雲		2												2																	北白川C6:中津20中津への文様変遷を考える際重要
50	洗谷貝塚	1						8						4		1									1							中津1式古北白川C12:中津44
51	帝釈寄倉岩陰					1		3						1																		深鉢C3沈線文
52	大浜	2	2			1	11					1		2																		北白川C26:中津8
53	ナカダ浜	1	1										1																			A6はキャリバー形口縁
54	桂見	1	1	12			1	1				3	1	7													1					北白川C36:中津11

7. まとめ

以上、各地域の器種構成および文様を概観すると、近畿地方のなかでも京都府南部から滋賀県西端にかけての地域には深鉢A1類、B1類、C1類といった古相を示す土器が存在し、その周辺においてはA4、A5、A6、C2、C3類が多くみられる傾向がある。このことからやはり、北白川C式は加曽利E式の影響を近畿地方中心部が受容し、主導的な役割を果たしつつ周辺部へと波及していった（玉田1985）様相が想定できる。その波及の仕方をみていくならば、東海地方では、北白川C式の新しい段階の土器を受容しつつ、曽利系の影響のもと、ひとつの異なった土器様相をつくりだしたと言えよう。一方瀬戸内から山陰、丹後、若狭地方にかけての地域でもやはり新しい段階の北白川C式を受容し、特に日本海側では深鉢A3類や刺突文の多用、深鉢C類の比率の高さを特徴とする地域差を生みだす。この大きな2つの地域差の他にも、各地域において、それぞれ小さな地域差がうかがえる。

こうした北白川C式土器の波及のなかにおける、小阪遺跡出土土器群の位置付けについて触れておきたい。近畿地方においても、北河内や北摂では、滋賀県、京都府南部を経て流入したものと考えられる、星田式に代表される北白川C式土器のなかでも古い様相がみられる。一方、河内、和泉から紀伊、大和にかけては深鉢D類の存在に代表される器種構成などから、北白川C式土器は幾分遅れて受容されたものとする。予察を述べるならば、星田遺跡と野畑遺跡第5層がいわゆる星田式で1段階設定でき、これに野畑遺跡第4層が続く。野畑遺跡第4層と小阪遺跡出土土器を比較すると、隆帯による文様の欠如などから小阪遺跡出土土器が新しく位置付けられ、少なくとも3段階の変遷は認められる。

以上より小阪遺跡出土土器は、加曽利E式の影響を強く受け滋賀県から京都府南部にかけての地域で成立した北白川C式土器が、日本海側、瀬戸内側、太平洋側へそれぞれの方向性をもって波及するなか、大阪湾沿岸沿いに摂津、河内、和泉へと南下するラインのなかで、幾段階かの変遷を経た北白川C式のなかでも末葉段階の土器群と考えられる。

最後に中津式への変遷について触れておく。北白川C式から中津式への文様変遷を考えるにあたっての好資料は、北白川追分町遺跡には希薄であり、広島県洗谷貝塚など比較的周辺部に多い傾向がある。これより、受容は1段階遅れるものの、受容後は各地域が主体的に北白川C式土器を消化していった可能性が考えられる。

実見した資料は限られたものであり、報告書においても全ての土器がとりあげられているとはいえず、各遺跡出土土器の器種構成は確定的なものとはいえない。しかしながら、小阪遺跡出土土器の整理を端緒とし、現段階における資料のなかで北白川C式の成立と波及、およびそのなかにおける小阪遺跡出土土器の位置付けについての概括的なモデルを述べた。資料の蓄積に伴い再考していきたい。

引用・参考文献

- 泉 拓良 1982「西日本縄文土器再考—近畿地方縄文中期後半を中心に—」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』
- 泉 拓良 1985「北白川追分町遺跡出土の縄文土器—中期末縄文土器の分析—」『京都大学埋蔵文化財調査報告3—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 泉 拓良・家根祥多ほか 1985『京都大学埋蔵文化財調査報告3—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 泉 拓良 1988「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観』第3巻 中期II
- 岡田茂弘 1965「縄文文化の発展と地域性7 近畿」『日本の考古学』II 縄文時代
- 桜井敬夫 1963「星田旭中期縄文遺跡」『交野町史』
- 島田暁・小島俊次 1958「布留遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報10』
- 清水芳裕 1984「京都大学北部構内BF33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 玉田芳英 1985「縄文時代中期末～後期初頭の土器について」『片吹遺跡 龍野市文化財調査報告書6』龍野市教育委員会

- 中村徹也 1974『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
 中村徹也 1975『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
 増子康真 1981『東海地方西部の縄文文化』『東海先史文化の諸段階（本文編）補足改訂版』
 増子康真 1988『近畿地方縄文中期後半土器編年の問題点—東海西部との対比から—』『巽三郎先生古稀記念論集求真能道』
 松尾信裕 1986『まとめ 仏並遺跡の縄文土器』『財大阪府埋蔵文化財協会報告第5輯 仏並遺跡発掘調査報告書』財大阪府埋蔵文化財協会
 宮野淳一 1983『河内における縄文後期文化の成立』『関西大学考古学研究室開設三十周年記念 考古学論叢』

資料文献（Tab.94の番号を参照）

- 1 東大阪市教育委員会 1976『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16 馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ』
- 2 瓜生堂遺跡調査会 1980『恩智遺跡Ⅰ』
- 3 難波宮址顕彰会 1978『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告』
- 4 豊中市教育委員会 1981『野畑遺跡第1次発掘調査報告』
- 5 野畑遺跡発掘調査団 1986『野畑遺跡第2次発掘調査概報』に資料の一部が掲載されている。その他の資料については豊中市教育委員会 柳本照男氏、橋本正幸氏、酒井泰子氏（現大阪府教育委員会）、清水京子氏のご好意により資料を見せて頂いた。
- 6 財大阪文化財センター 1984『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 7 柏原市教育委員会 1984『柏原市文化財報告1983—Ⅳ 柏原市所在遺跡発掘調査概報—大泉・田辺・本郷遺跡—1983年度』
- 8 柏原市教育委員会 1987『柏原市文化財概報1986—Ⅷ 安堂遺跡 1986年度』
- 9 三日月市遺跡調査会 1988『大阪府河内長野市 三日月市遺跡調査報告書Ⅰ』
- 10 大阪府教育委員会 1986『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅲ—東大阪市東石切町・西石切町所在—』
- 11 財大阪府文化財協会 1986『財大阪府埋蔵文化財協会報告第5輯 仏並遺跡発掘調査報告書』
- 12 大阪府教育委員会 宮野淳一氏に教えて頂いた。
- 13 桜井敬夫 1963『星田旭中期縄文遺跡』『交野町史』
 片山長三編 1970『交野町史 改訂増補1』
 枚方市史編集委員会 1976『枚方市史』第1巻
- 14 縄手遺跡調査会 1971『縄手遺跡』
- 15 奈良国立文化財研究所 1987『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』
- 16 港北ニュータウン埋文調査団 1985『称名寺土器に関する交流研究会資料集』
- 17 橋本市教育委員会 1984『市協遺跡ほか発掘調査概報』
- 18 和歌山県教育委員会 1983『伊都郡かつらぎ町船岡山遺跡発掘調査概要Ⅳ』
- 19 小野山節・清水芳裕編 1979『和歌山県北山村下尾井遺跡』
- 20 松崎寿和・間壁忠彦 1978『縄文後期文化 西日本』『新版考古学講座』3 先史文化
- 21 泉 拓良 1985『北白川追分町遺跡出土の縄文土器 中期末縄文土器の分析』『京都大学埋蔵文化財調査報告3—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 22 京都大学埋蔵文化財研究センター 1985『京都大学埋蔵文化財調査報告3—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
- 23 清水芳裕 1984『京都大学北部構内B F 3 3 区の発掘調査』『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 24 中村徹也 1974『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
 中村徹也 1975『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
- 25 梅原末治 1935『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告16 京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告』
- 26 16に同じ
- 27 玉田芳英 1985『縄文時代中期末～後期初頭の土器について』『片吹遺跡 龍野市文化財調査報告書6』龍野市教育委員会
- 28 帝塚山大学考古学研究室 1966『京都府丹後町平遺跡調査概要』
- 29 大宮町教育委員会 1979『大宮町文化財調査報告第1冊 裏陰遺跡発掘調査概報』
- 30 湖西線関係遺跡発掘調査団 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』
- 31 小江慶雄 1966『琵琶湖の湖底遺跡』『京都教育大学紀要』30
- 32 滋賀県立近江風土記の丘資料館 1984『近江の縄文時代』
- 33 京都教育大学考古学研究会 1989『考古学資料室所蔵の縄文時代遺物資料紹介』『史想』
- 34 小玉道明 1970『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』
- 35 亀山市教育委員会 1978『亀山市埋蔵文化財調査報告Ⅰ 地藏僧遺跡発掘調査報告』
- 36 田村陽一 1990『鈴鹿市起A遺跡出土の縄文中期末葉の土器』『Mie history』2
- 37 16に同じ
- 38 16に同じ
- 39 山下勝年 1975『愛知県南知多町内海林ノ峰貝塚試掘概報』『古代学研究』77
- 40 名古屋市教育委員会 1989『名古屋市中区栄一丁目 堅三蔵通遺跡 第8次・第9次調査の概要』
- 41 名古屋市見晴台考古資料館 1987『瑞穂遺跡 第4次調査の概要』
- 42 大野市教育委員会 1985『大野市文化財調査報告書第3冊 右近次郎遺跡Ⅱ』
- 43 兵庫県教育委員会 1985『兵庫県文化財調査報告書第30冊 丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』
- 44 龍野市教育委員会 1985『片吹遺跡 龍野市文化財調査報告書6』
- 45 古代学協会 1984『神戸市灘区篠原A遺跡』
- 46 倉敷考古館 1967『岡山県昭和町日羽ケンギョウ田（健行田）遺跡』『倉敷考古館研究集報』11
- 47 倉敷考古館 1971『里木貝塚』『倉敷考古館研究集報』7
- 48 奈良国立文化財研究所 1989『奈良国立文化財研究所史料第32冊 福田貝塚資料 山内清男考古資料2』
- 49 島田貞彦・清野謙次・梅原末治 1920『備中国浅口郡大島村津雲貝塚発掘』『京都帝国大学文学部考古学研究报告』5
- 50 小都 隆 1976『洗谷貝塚』
- 51 帝釈峡遺跡群発掘調査団 1964『帝釈峡遺跡群の調査研究』『広島考古研究』3
 帝釈峡遺跡群発掘調査団 1965『帝釈峡遺跡群の調査研究Ⅱ』『広島考古研究』4
- 52 16に同じ
- 53 瀬戸内海歴史民俗資料館 1978『考古資料収蔵目録Ⅰ 縄文時代編・図版解説付』
- 54 鳥取市教育委員会 1978『鳥取市文化財報告書Ⅴ 桂見遺跡発掘調査報告』